

書評

評書

津山正幹 著
民家と日本人

森 隆男

A 5 版 / 183 ページ
本体価格：3800 円 (+ 税)
2008 年 9 月
慶友社

これまで民家を主題にした多くの本が刊行されたが、そのほとんどが建築学の立場から述べたものであった。これらの中にあつて本書は民俗学の立場で住む人の視点から民家を見つめ、日本人にとっての意味を追求した成果である。それは収録された写真の多くに、人物が織り込まれていることからもうかがうことができる。

筆者は長年にわたり、フィールドワークを通して民家に関する膨大な資料を収集している。丁寧な調査が評価されて自治体史の執筆を依頼され、多くの成果物も提出してきた。話者と向き合い、時間をかけて相手の語りに耳を傾けるのが筆者の調査

●書評 ●書誌紹介

- 「民家と日本人」
- 「環境・地域・心性―民俗学の可能性―」
- 「ポックリ信仰―長寿と安楽往生祈願―」
- 「近代日本と戦死者祭祀」
- 「柳田國男を歩く 肥後・奥日向の旅」

方法である。それにより住む人の本音の部分で民家を理解してきた研究者である。あとがきで、民家を訪ねて感動がないのであれば自分自身に問題があると記している。筆者の観察に加えて話者と誠実に接して得た感動が、これまでのフィールドワークを支えてきたのであろう。

本書ではそれぞれのテーマについて、調査報告書や研究論文で発表された多様な事例を取りあげて諸説を紹介している。その上で最後に筆者の考えを述べるのが本書の基本的なスタイルである。これを買ったのが本書の前半を占める建築儀礼に関する記述である。それに対し後半では風呂や便所、竈、いろいろという日常生活の場について、具体的な資料をあげて自説を中心に展開している。なお前半と後半の間に民家の境界に関する論考が挿入されている。民家を空間的に把握し、そこで展開される儀礼から境界のもつ意味を追求している。

各章の概要は次のとおりである。

第一章「粥で祝う民家」では、建築儀礼のうち上棟式や屋根葺き祝、屋移り祝に餅や粥が用いられることに注目し、民家の建築という一連の儀礼における粥の意味をさぐったものであ

る。これらの三段階の儀礼の中で、最後の屋移り祝に粥を用いる事例が最も多いことから、高い呪力をもった粥の力で神霊を屋内に封じ込め安住の場を創出したと主張する。

建築儀礼では棟梁や大工など家作りに直接参加する人だけでなく、子供や女性を含めた村中の人が粥が振舞われる。新潟県では屋移りの日に杵で空白を叩いたり箕を叩いて、村の人びとに音で知らせるという興味深い事例が紹介されている。同様の方法で田の神を招く習俗が想起される興味深い資料である。一方で、粥を食べる子供を両親がそろっているなどの条件を満たした家の子供に限定するところもあり、この点について筆者は子供が神霊を招くよりましの役割を果たしているとみなしている。このようにして招かれ、封じ込まれた神霊が家の神になったと主張する。

第二章「棟木の力」では、上棟式で使用される五色の幟の意味を問うことから始まる。式が終了した後、この幟が安産のまじないとして腹帯に転用される習俗が広く分布している。また上棟式に撒かれる餅を拾って食べると安産になるという。筆者はこれらの習俗の背景に新しい生命の誕生とつながる要素を見出している。その上で上棟式で棟木をあげる行為が夕方になるのは、作業の終了時間の結果ではなく本来は満潮時に行なうべき儀礼で、人の出産と同様に満潮時に民家に生命を吹き込むためであるという重要な指摘をしている。沖縄では真夜中の満潮時に棟梁がひそかに棟に登り、槌で棟木を三回叩いて家にマブ

(魂)を入れるという報告があり、評者も同意見である。屋根が葺きあがると夫婦が初めて泊まる「葺き籠り」が行なわれる。人の生命の誕生と民家の誕生を重ねた類感呪術といえよう。棟木に男女の性器を模した作り物を吊るす習俗が福島県に見られる。火伏せの呪術と理解され筆者もそれを支持しているようであるが、それまでの論旨の延長線上に位置づけるとき別の解釈も可能であろう。なお上棟式に棟梁が履いていた草履の鼻緒を切って投げたり、鼻緒を切って梁に吊るす事例が報告されている。棟梁がそのまま草履をはいて帰宅すると家の魂が抜けるという。筆者の解説はないが、棟梁のはく草履を神霊の依り代とみなす興味深い資料である。

この章では小屋組みが作り出す空間をソラと呼ぶことに着目し、その意味をさぐった節も設けられている。この民俗語彙はすでに中世の文献にみられるという。筆者はソラが高所を意味する空間を指しているのではなく、棟木をいたたく神聖な空間を指し、棟木の霊力が及ぶ一体の空間が民家であると主張する。評者は住まいの空間が垂直軸上に上下の秩序をもち、神と人がすみわけをしていたと考えており、再考の余地が生じることになった。

第三章「雨のカーテン」では民家と屋敷の境界を取りあげている。とくに雨垂れ落ちに注目し、通過儀礼の際に顕在化する境界としての機能を検証している。出産前後から一〇〇日目の食い初めまで、雨垂れ落ちから拾ってきた小石が関わる習俗が

広く分布する。葬送の際、棺の釘を雨垂れ落ちから拾ってきた石で打つところもある。また出棺の際に死者の茶碗を割る儀礼も雨垂れ落ちの石を使用する。そのほか出産のエナや産湯を捨てる場所、死者の枕飯を炊く場所を雨垂れ落ちとするとところがあるという。このような資料をもとに雨垂れ落ちは生と死をつかさどる生命力をもった場所であると指摘し、その背景を神聖な境界という特異な空間に存在する力に求めている。

第四章「極上の風呂と便所」では、便所と風呂がセットになって配置されていることに注目する。出入り口付近に小便所を設けた民家では、壁を隔てて屋内側に風呂を設けている。屋外に別棟で設ける場合も両者がセットになっていることが多い。これは糞尿と風呂の湯を一つの溜槽に受け肥料として利用するためである。厩で飼育していた牛馬の糞尿も貴重な下肥であった。近世の農書が肥料の効用を強調したことが背景にあるとの説を紹介している。

数軒の家が交代で風呂を沸かす「もらい風呂」の習俗は労力や燃料の節約、隣人同士で良好な人間関係を築くなどの利点があるが、筆者は肥料として利用できる湯の獲得が本音にあるとみている。風呂の垢を背負って帰ることをコモリと呼んでいるところがあるからである。風呂と便所、台所は民家の中で最も大きく変容した設備であるが、これらに対するわれわれの感覚も大きく変化したことを知ることができよう。

都市部の住民の糞尿は近郊農家に売られて下肥として使用さ

れ、そのための流通機構も整備されていた。大阪でも同様で、街の中を流れる河川は肥舟が往来した。まさにエコ社会が成立していたことにも言及している。

第五章「火所と神」では、『日本民俗地図』のデータと調査事例から、竈の専有地域が東海から瀬戸内、九州北部地方に、炉の専有地域が北陸地方と東北地方、西日本でも中国・四国地方の山間部、九州地方の南部に分布していることを示した。その上で筆者は、一般にご飯は「炊く」と表現するが、「煮る」と表現する地域が炉の専有地域と重なる点に着目する。ご飯を鍋で煮る「湯取りの方法」は、ご飯の粘り気が少なくなり本来おいしさが損なわれるといわれるが、米ではなく稗や粟の調理法であったという。湯取りの方法が残存した地域は稗や粟の栽培地であった。炉と竈の存在がその土地の主食の栽培物と密接に関わっていることを指摘した重要な成果である。

また火の神や竈神が家の神の性格をもっていることは、すでに多くの研究者によって指摘されている。筆者は名称にカマのついた東北のカマ男、関東のオカマ様、新潟のカマ神を取りあげ、それぞれの地域で竈が普及した時期を検証し、いずれもその時期が新しいことを確認している。竈が存在しない地域に竈に関わる神霊を祀る必要はないとの理由から、これらの神々に共通する「カマ」は竈や釜に由来するものではないと明快に否定する。カマが中心部分をさす言葉であることに注目してカマの語がつく神霊に生命に関わる重要な機能を認めている。この

指摘も卓見である。

本書の刊行により民俗学が得た成果と課題について検討したい。

本書の最も重要な成果は、建築儀礼を通して魂を吹き込まれた民家が人の生死と密接に関わるという観念を抽出したことである。その象徴が棟木であり、棟木が創り出す空間こそが人にとって安住の場になったと主張している。棟に上って魂呼びをする理由について、天に近いところで叫んでいるのではなく、棟木の靈力に頼って生への回帰を図っており、棟木に宿る神靈が家族の生命をも左右するという斬新な解釈を下した。

かつて建築学者の伊藤ていじは『民家は生きてきた』を刊行した。民家が残存してきたことを喜び、その学術的な価値を指摘し、今後の保存を訴える内容で、その書名に評者は心踊らされた記憶がある。一方、著者は本書のまえがきで「まさに民家は生きている」と表現したが、その趣意は民家が生命をもつ存在として観念されてきたことを指摘することであり、それを導くために建築儀礼に焦点を当てた。建築儀礼は話者の語りからどうかができる住居観の抽出に有効である。しかし解釈の仕方によってはまったく逆の結果を導くこともあり、魅力的なテーマではあるが危険性を内包する。これを手がけた研究は少なく評者も躊躇してきたテーマであるが、筆者は豊富な経験と資料を武器に敢然とアプローチしている。この点も高く評価したい。

近年、伝承母体の崩壊により、良質の資料を採集することが困難になったといわれる。その結果、フィールドワークが軽視される傾向にあるのではなからうか。フィールドワークで得た情報は、すでに報告されている資料も含め新しい解釈をするための貴重な手がかりを与えてくれることが多い。第五章の成果は各地の竈や炉を調査してきた筆者が、竈の普及時期についてフィールドで考えたことがベースにあると思われる。オーソドックスな民俗学の研究者である筆者の姿勢に学ぶことは多い。

一方で、いくつかの課題も残ることになった。まず、筆者は「生きている民家」観を創出する民家の魂が棟木に宿っており、それが家の神であると主張する。論旨をより明確にするために、「家の神」について筆者の考えを提示する必要がある。家の神はいままで明確な定義をすることなく使用されてきたからである。ちなみに評者は、中世の文献にも「家神祭」がみられるが、家の神は①家そのものを守る神、②家族の生命や財産を守る神、③家の繁栄と永続という制度としての家を守る神の総称で、仏壇に祀られる祖先の霊や座敷童子などを含む広い概念でとらえている。筆者は②の意味に重点をおいて使用しているように思われる。なお家の神が顕在化するのには正月に供物を供える大黒柱等の中心柱であり、棟木との関係を明らかにする説明が欲しい。

第一章で指摘された建築儀礼における粥の役割について、下

野敏見は材木に付着してきた山野の精霊に対する供物とし、精霊を追い払う役割が期待されていると筆者とは逆の解釈をしている。下野の説は九州南部や南西諸島で採集した資料を中心に構成されており、評者は地域差を念頭に置いた論議が必要と考えている。

さて重要な資料の紹介や指摘が必ずしも次の展開につながっていないように思われる。そのため読者はその価値を十分に理解することなく読み進めてしまうことになる。たとえば第一章で、福島県の会津地方では地鎮祭のとき土盛りに茅を挿しておき、掛け声とともに鎌で茅を切つて後に鍬を入れるという事例が紹介されている。自然の地を屋敷地に転換する意味をもつ重要な儀礼と思われるが、ここで地鎮祭の意味を論じて欲しかったところである。

本書を一気に読んでしまう人が多いのではなからうか。筆者は多くの事例とともに諸説を取りあげているが、それぞれの説に対しほとんど批判することなく書き進んでいるからである。その多くが筆者も同意する説ということもあろうが、批判的に取り上げる説があるからこそ、筆者の説が浮き彫りにされるはずである。これは筆者の温厚な性格によるものかもしれないが、もつとも第二章において、魂呼びは周囲の人びとの注意を喚起するパフォーマンスとする考え方に「民俗学は不要ということになる」と猛然と異議を唱えている。ここには民俗学に対する筆者の熱い思いがこめられていてうれしく思った次第である。

本書の刊行は民俗学にとって大きな収穫である。しかし民家に関わる課題は多く残されている。今後、民家の空間を構成する要素に関する研究や、周辺諸民族との比較研究も進めていく必要がある。その際本書の成果が大いに役立つはずである。近年、民家を含む伝統的建造物群の選定などがすすめられ、一般の人たちが民家に対してさらに関心をもつようになった。本書は民家のもつ魅力を内側からとらえ、民家研究の奥深さを教えてくれる。読みやすい文章と豊富な事例は、一般の人たちも民家の世界に容易にいざなうことだろう。

《参考文献》

- 牧田 茂 一九五八 「建築儀礼」『日本民俗学大系6』平凡社
下野敏見 一九八三 「建築儀礼の特色と問題点」『日本民俗学』
一五〇
近藤喜博 一九八一 「家の神」塙書房